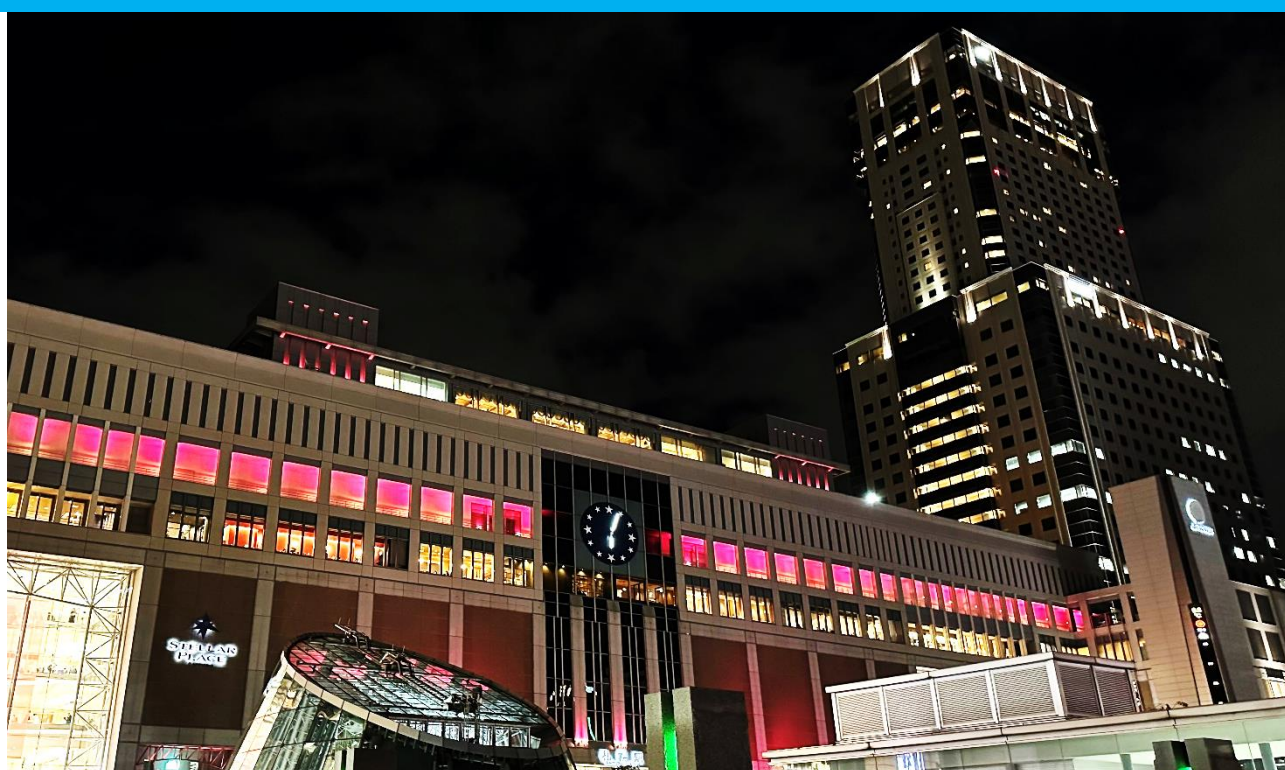


# 第60回 北海道学校体育研究大会札幌大会

兼 第64回全国学校体育研究大会北海道大会フレス大会

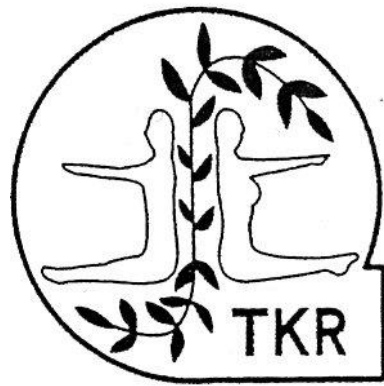
兼 第33回札幌市学校体育研究大会

## 研究報告書



令和6年10月18日（金）

北海道学校体育研究連盟



# 第 60 回北海道学校体育研究大会札幌大会 兼 第 64 回全国学校体育研究大会北海道大会プレ大会 兼 第 33 回札幌市学校体育研究大会 研究報告書

## —目 次—

### ◇ 授業記録

札幌市立北九条小学校 <sup>きたくじょう</sup>	・・・ 1
札幌市立白楊小学校 <sup>はくよう</sup>	・・・ 3
札幌市立羊丘中学校 <sup>ひつじがおか</sup>	・・・ 5

### ◇ 大会を終えて

第 60 回北海道学校体育研究大会札幌大会 兼 第 64 回全国学校体育研究大会北海道大会プレ大会 兼 第 33 回札幌市学校体育研究大会	実行副委員長 谷 寧	・・・ 7
(札幌市学校体育研究連盟 委員長)		

### ◇ 基調報告及び札幌支部の研究～第 64 回全国学校体育研究大会北海道大会に向けて

### ◇ 分科会記録

札幌市立北九条小学校会場 <sup>きたくじょう</sup>	・・・ 16
札幌市立白楊小学校会場 <sup>はくよう</sup>	・・・ 18
札幌市立羊丘中学校会場 <sup>ひつじがおか</sup>	・・・ 20

一次公開：蝦名 裕貴 教諭（北九条小） 児童：3年2組 32名  
体づくり運動 多様な動きをつくる運動 単元名「お宝を探せ！トレジャーハンター！」

### <授業の様子>

#### ○準備活動 ワールドツアー

- ・子どもたちは挨拶の後、ペアで縄跳びをする活動やグループでフラフープをくぐるなどの体ほぐしの運動を行った。その後のワールドツアーでは動物歩きや、手押し車での移動、雑巾に乗った友達を引っ張る活動を行った。どの活動でも、教師が体操太鼓を使ってテンポ良く進め、子どもたちの良い動きを価値付けることで、子どもたちは笑顔で活動を進めていた。



#### ○課題を見付ける活動

- ・子どもたちは前時の振り返りをワークシートで確認した。教師が子どもの思いをウェビングマップで共有することで、子どもたちが本時の学習課題に対して見通しをもつことができた。



テクニシャンワールドでどんなお宝が見付けられるかな？

#### ○お宝発見タイム①

- ・「お宝を見付けよう」という本時の課題を確認した後、トレジャーマップを活用しながら、「チクタクの森」「コーン林」「フリーパーク」の三つの場に分かれて、ペアで活動を行った。
- ・教師は子どもたちの活動の様子を見取り、子どもの「～したい」を聞き取っていた。課題解決が難しい子どもに対しては、手本となる子どもを教師が見つないでいた。困っている子どもが、他者の動きを模倣する中で課題解決に向かう姿が見られた。



#### ○お宝発見タイム②

- ・お宝発見タイム②の前に教師が一度子どもたちを集合させ、用具の使い方や、運動の行い方、ペアでの学び方の再確認を行った。子どもたちがもう一度課題に立ち返り、ペアで活動を進めることができた。



#### ○まとめ

- ・ペアで振り返りを行った。教師が子どもたちの振り返り活動に対して積極的に「何が楽しかったか。」「どんなことをしたのか。」を問うことで、子どもの思考を深めていた。振り返りが難しい子どもに対しては、教師が個別に関わることで、安心して本時の学びを教師へ伝えていた。
- ・全体で本時の振り返りを確認した。子どもの発言を教師が全体に返すことで、次時へのつながりが芽生えていた。



#### ○整理運動

#### ○後片付け

二次公開：早川 詩織 教諭（北九条小） 児童：6年2組 28名  
 器械運動 跳び箱運動 単元名「跳び箱運動レベルアップへの道」

<授業の様子>

○準備活動

・子どもたちは挨拶の後、体操を行った。感覚づくりでは、平均台や肋木逆立ちで腕支持感覚を養ったり、ステージの上り下りを利用しての前転、自分に合った高さを選択しての開脚跳びを行ったりした。教師はステージの近くで子どもの安全確認と、良い動きを価値付けすることで子どもは安心して学習に取り組むことができた。



○課題を見付ける活動

・子どもたちは前時での振り返りから、「新しい技に挑戦」か「より安定させる」のどちらかを選択した。教師はその中で、自分の課題はどこにあるのか子どもたちに確認し、掲示したロードマップにネームカードを貼るよう指示した。そうすることで技の中のどこに課題があるかが明確になった。



どのように練習をすると課題を解決できるかな

○グループでの活動

- ・子どもたちは課題解決に向けて、ロードマップを基に、場を選択して自分たちで学習を進めていた。教師は、課題解決の場を選ぶのに迷っている子どもに対し、対話しながら選択できるようにしていた。子どもたちは場が決まったことで意欲的に取り組むことができていた。
- ・場の選択は適切であるが課題解決が難しい子どもに対しては、手本となる子どもの動きを見せることで、技のポイントに気付かせたり、子ども同士の教え合いを促したりしていた。それでも解決が難しい場合は教師が子どもに直接指導し、子どもたちの「できた。」を最後まで支えていた。
- ・子どもたちは、自分たちで場を選び、同じ場にいる子どもたちと積極的に関わりながら練習をしていた。その際に、教師が練習に取り組む前に「なぜその場を選択しているのか。」「課題は何か。」を確認することで、周りの子どもからのアドバイスが増えた。



○まとめ

・子どもたちはタブレット端末に、今日取り組んだ技とどんな練習をしたか、次に向けての課題を入力した。教師は、振り返りに困っている子どもに対し、今日の課題や取り組んだ場を丁寧に確認し、「どうやってできたのか。」「次はどうしたいのか。」を問うことで、本時の学びの実感と次時への見通しをもつことができた。

○整理運動

○後片付け

一次公開：西村 勇吾 教諭（白楊小） 児童：2年1組 33名  
表現リズム遊び リズム遊び 単元名「リズムに乗って楽しく踊ろう！」

<授業の様子>

○場の設定、安全確認

○あっためタイム（準備活動）

- ・挨拶、準備運動、先生まねっこ

「リズムに乗りながら、腕を回してみよう。」という教師の声掛けに合わせて、リズムに乗りながら体をほぐす子どもの様子が見られた。

○課題を見付ける活動

- ・前時の想起を基に課題を見付ける

教師が「前回、人気の動きがあったね。」と問いかけ、子どもは「土を掘っているような踊りが人気だった。」と、踊りながら前時を振り返っていた。教師が「土を掘る踊りは、跳ねるが基になっているんだね。」と切り返すことで、子どもは基本となる五つの動きに着目し、「他の動きでも、工夫して踊りたい。」という思いを生んでいた。



リズムに乗って踊り方をどう工夫しようかな

この踊り方も面白そうだな

○うごかしタイム

踊りの確認をする中で、「手をあげるパターンもあるね。」と工夫を始めている子どもの動きを価値付けることで、「もっと他の工夫を見付けて踊りたい。」という意欲を高めていた。

○おどりタイム①

踊り方を工夫したい子どもは帽子を赤、友達と合わせる踊り方を工夫したい子どもは帽子を白にすることで、課題を意識して踊ることができていた。「手をあげるパターンもあるね。」と工夫を始めている子どもの動きを価値付けることで、「もっと他の工夫を見付けて踊りたい。」という意欲を高めていた。



友達と動きを合わせて踊りたいな

○ムービータイム

- ・3人1組となり、踊る→応援→撮影をローテーションする
- ・サビの前まで踊る

動画を撮影している子どもから、「腕を振っていていいね。」と友達の踊りのよい部分を具体的に声掛けする姿が見られた。また、撮影する踊りをあえてサビの部分ではなく、サビ前までにすることで、「サビまで踊りたい。」という思いが生まれ、おどりタイム②で工夫を楽しむ姿に繋がった。



踊り方の工夫をマネしてみたいな

○おどりタイム②

授業の中で取り上げられた踊りの工夫を基に踊る子どもの姿が見られた。

○振り返り・整理運動・後片付け

ワークシートで、今日できた工夫を選択したり、工夫の仕方を言葉で書いたりした。

二次公開：檜田 翔太 教諭（白楊小） 児童：4年1組 23名  
走・跳の運動 高跳び 単元名「High Jump!」

<授業の様子>

○場の設定、安全確認

○準備活動

○ジャンピングタイム

前時までの自分の動きを振り返りながら、練習の場を使って、高く跳んだり足を振り上げたりしていた。

○めあて確認 高さ決めタイム

前時の振り返りを基に、跳ぶ高さを設定し板書のネームプレートを移動した。

○課題を見付ける活動

9マスに分けられたコート上で、どこからスタートするのか、どこで踏み切るのかを選択した。自分の動きを視覚化することで、スピードにのった助走をするためのスタート位置と踏み切り位置の二つに視点を絞ることができた。



昨日よりも高く跳びたいな



スタート位置は6番のマスにしよう

スピードにのった助走をするためのスタート位置と踏み切り位置はどこかな

○練習タイム

・練習タイムの中で、教師が「今は、どっちの足がゴムにぶつかったかな。」と問いかけることで、「振り上げる足が当たってしまった。」「それなら踏み切る位置をもう少し後ろにしてみたらいいんじゃない。」と子ども同士で関わる姿が生まれていた。また、「足があまり上がらないから、足を振り上げる練習ができる場に行こう。」と、自分達に必要な練習が何かを考え、練習を選択している子どもの姿も見られた。



踏み切り位置をもう少し後ろにしようかな

・ICTを活用し、友達の動きを見て、「もっとスピードにのるために、後ろからスタートした方がいいんじゃない。」と声を掛け合っていた。

○競争タイム

競争前に自分が飛ぶ高さを設定し、グループごとに取り組んだ。クラスごとの合計点数を競い合うルールに設定することで、他のグループも仲間となり、声を掛け合いながら取り組む姿が見られた。



動画を観ると、振り上げ足をもっと上げなきゃいけない気がしてきたよ

○グループやクラスの得点を発表する

今までの得点と比較することで、自分達の伸びを実感し、「次の時間は、もっと得点を伸ばしたい。」と、意欲を高める姿が見られた。

○振り返り・整理運動・後片付け

・ワークシートで、今日できたことや次時どの高さに挑戦したかななどを振り返った。

一次公開：黒坂 洋匠 教諭（羊丘中） 生徒：1年1組 34名  
単元名「器械運動 平均台運動」

<授業の様子>

○準備活動

準備運動・平均台運動の基本技の練習として3分間の「サーキットタイム」を行った。

○課題を見付ける活動

前時に様々な技に挑戦して、「上がるーなかの技ー下りる」の構成を考え、複数の技のグループを取り入れた試技の撮影を行った。その後、撮影した動画を見ながら、「出来栄チェックリスト」を用いて各自で自己評価を行った。本時では、教師が前時の振り返りとともに「自己評価は正しいかな。自信あるかな。」と発問し、生徒は各自の動画をグループで確認して「相互評価」により自分の試技の課題を見付ける活動を行った。



○課題提示し解決に向けた見通しをもつ活動

自己の課題を解決して、より良い試技にするための方策についてステージのスクリーンに教師が提示した練習方法を確認した。

自分の課題を解決するにはどんな練習が必要か

○課題解決に向けた活動

- A：ポイントを見ながら移動する。
- B：手拍子をしてもらいながら移動する。
- C：手を支えてもらいながら技の練習をする。
- D：体を支えてもらいながら技の練習をする。
- E：試技したい平均台よりも低い平均台（床）で練習をする。
- F：跳び箱の上へ（から）着地する練習をする。

チェックリストで見つけた自己の課題を解決するために、上記の6つの練習を選択してグループで協力的に活動を行った。活動の中盤では、ただ、何となく練習をするだけでなく、「なぜ、その練習を選んだのか。」「〇〇をすることで〇〇できるようになる。」「根拠をもって練習を選択することが大切なんだね。」と教師が価値付けをした。また、練習を継続するだけでなく、練習内容を組み合わせることや複数の練習にチャレンジすること、自分の試技変容をタイムシフトカメラや1人1台端末による撮影でチェックすることなど、課題解決に向けた活動が深まるように確認した。



ポイントを見ることで目線があたりそうだ



○連続技の撮影

今回の練習で自分の試技にどのくらいの変容があったか、グループで次時の中間発表会で使用する自己の試技動画を撮影した。

○まとめ・振り返り

今日の学習を振り返り、選択した練習方法と根拠について学習カードにまとめ、全体で共有した。



二次公開：及川 史斗夢 教諭（米里中） 生徒：2年2組 32名  
単元名「体育理論 運動やスポーツの安全な行い方」

### <授業の様子>

#### ○課題を見付ける活動

前時には、保健室来室記録を見て、運動やスポーツによるけがが多いということを実感した。けがをしないためにどのようなことに気を付けているか、というアンケートから、多く出てきた言葉をテキストマイニングで提示した。そこには、「運動」「ストレッチ」「準備」「周り」という言葉が多く出ていた。教師が「本当にストレッチや準備運動をするだけでけがは防げるのかな。」と問うと、「防げないと思う。」という声が出てきた。



#### ○カードゲームを用いて、けがの場面を予想する

- ①競技カード、けが・体調不良カードから1枚ずつ引く
- ②さらに条件カードを1枚加えて引き、場面を予想する

けがや体調不良の場面について、思考を広げるために、カードゲームを行った。①は、競技名が書いてあるカードとけがや体調不良の種類が書いてあるカードを1枚ずつ引き、場面を考えて仲間に伝える、という活動である。

②は、①に加えて条件が限定されるカードを引くことで、さらに新たな気づきを生み出す活動である。生徒は小グループでの協働的な学びを通して、思考を広げている様子であった。



安全に運動するためにはどんなことに気を付ける必要があるだろうか

#### ○1人1台端末を用いて、けがをしないための方法を考える

- ①グループ毎に事例を与え、「対処カード」を作る
- ②個人で考えたあとに、グループで交流する。

ABグループ：週6日長時間キャッチボールをして肩を痛めた

CDグループ：授業開始後に全力で走って足をひねった

EFグループ：20年後の自分が5km走って体調不良になった

GHグループ：器械運動（平均台）でけがをした

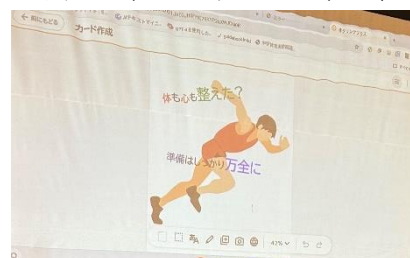
与えられた事例への対処方法を個人で考え、1人1台端末を使用して小グループで共有した後、全体で発表した。安全に運動するためにどんなことに気を付ければ良いか、ということ、生徒の言葉を拾いながら教師がまとめていった。



練習時間を減らすと良いんじゃないかな。

#### ○「体育大会安全標語」を作成する

学んだ知識を活用しながら、タブレット端末を使用して、体育大会安全標語を作成した。なぜその標語を考えたか、という根拠を明確にすることで、知識の定着を狙った。



#### ○振り返り

今日の学習を振り返って、どんなことに気付くことができたか、という振り返りを行った。



## 「大会を終えて」

第 60 回北海道学校体育研究大会札幌大会  
兼 第 64 回全国学校体育研究大会北海道大会プレ大会  
兼 第 33 回札幌市学校体育研究大会

実行副委員長 谷 寧  
(札幌市立山の手小学校 校長)

第 57 回北海道学校体育研究大会札幌大会、コロナ禍の中で行われた大会は、試行錯誤の中、VTR 公開と Web 研究討議という今までにない方法で開催することができました。あれから 3 年、会同形式で行う札幌大会は、第 53 回大会以来でした。さらに今大会は、全国学校体育研究大会北海道大会のプレ大会も兼ねており、「明日の北海道・札幌を創る大会」といっても過言ではない大会でした。




今大会の大会主題は、「豊かなスポーツライフの実現を目指し、『自ら』課題を発見し、その解決に向けた学習過程を通して資質・能力を育む体育・保健体育学習」と設定しました。この主題は、これまでの札幌の歩みを総括し、未来に発信するためのものであると思っています。そして、次年度開催される第 64 回全国学校体育研究大会北海道大会の大会主題でもあります。今大会の成果と課題を明らかにし、子どもの姿で発信していけるよう努力を重ねていきたいと思っています。

さて、今大会は北海道各地より 280 名ほどの御参加をいただきました。ある授業会場では 100 名を超す方々に御参加いただき、運営の面でも大変学びが大きい大会となりました。大変多くの方々に御参加いただいたおかげで、分科会での討議もとても深まりました。改めて、子どもの姿を通して語り合うよさを感じることができました。「最大のおもてなしは授業」を合言葉に迎えた札幌大会でしたが、分科会での活発な討議や体育・保健体育学習に向かう参加者の熱量も含めて、各授業が皆様の学びにつながればとても嬉しいことでもあります。

結びに、このたびの北海道学校体育研究大会札幌大会が多くの成果をあげ、無事に終えることができましたのも、御協力いただいた会場校の皆様、御指導・御支援をいただいた助言者の皆様・北海道教育委員会・札幌市教育委員会・関係諸団体の皆様、そして御参会いただいた皆様の熱い研究討議のおかげです。心より感謝申し上げますとともに、令和 7 年度に行われる全国大会に向けて邁進していくことをお約束し、御挨拶といたします。

基調報告及び札幌支部の研究 ～令和7年度全国学校体育研究大会北海道大会に向けて～

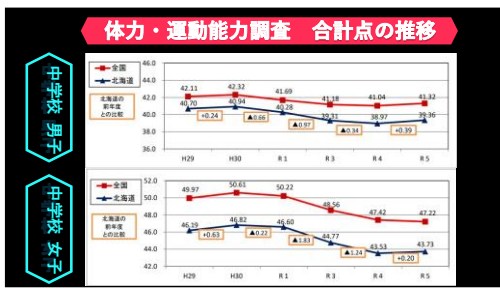
1		<p>基調報告ならびに研究発表をいたします。 札幌市立幌南小学校の余田です。どうぞよろしくお願い申し上げます。</p>
2		<p>まず、全道統一研究主題についての報告です。</p>
3		<p>令和3年度より全道統一研究主題を「つなぐ体育 ひらく未来」として設定しました。 この研究主題を実現するために、目指す授業像として「見方・考え方を豊かに働かせ、自己実現する体育活動」を副主題に掲げています。</p>
4		<p>学校体育は、児童生徒が生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目標としています。</p>
5		<p>しかしながら、私たちは子どもの体力の低下と運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向という課題を長年抱えています。</p>
6		<p>この課題に対応していくためには、改めて体育・健康に関する指導を確実に行っていくことが必要であり、これまで追究し続けてきた体育の本質的な魅力を引き出す工夫を十分に活用し、それをしっかりと子どもたちが味わえるようにすることが大切です。</p>

7	<p><b>つなぐ 体育</b></p> <p>児童生徒と遊び・運動・スポーツ</p> <p>児童生徒のスポーツライフ</p> <p>各校・各支部同士の情報共有・連携</p>	<p>そのためには、児童生徒と遊びや運動・スポーツとの関係が途切れることなくつないでいく教師の関わりが求められます。また、児童生徒のスポーツライフをつなぐこと、つまり、運動に関する経験を交流するなど子ども同士をつなぐ関わりも大切です。そうした各学校や各支部の取組を積極的に共有していく場や連携体制の強化を図ります。</p>
8	<p><b>つなぐ 体育</b></p> <p>体育・保健体育学習</p> <p>運動・スポーツに関連する教育活動</p> <p>地域社会における体育的活動</p>	<p>学校における体育・保健体育学習はもちろん、運動・スポーツに関連する教育活動や地域社会における体育的活動など、広い視野をもって子どもたちの豊かなスポーツライフを実現する基盤を培うことができるようにします。</p>
9	<p>習得した<b>知識</b>や<b>技能</b>を 活用して<b>課題解決</b></p>  <p>学んだことを 相手に分かりやすく伝える</p>	<p>学習指導要領解説では、「習得した知識や技能を活用して課題解決したり、学習したことを相手に分かりやすく伝えたりすること」が課題として示されています。課題を発見し、解決していく学習を通して子どもの資質・能力を育てていくことは学校体育の責任です。</p>
10	<p>体育や保健の <b>見方・考え方を働かせる</b></p>  <p>する・みる・支える・知ると 関連する手だてを設ける</p>	<p>また、学習指導要領では「体育や保健の見方・考え方を働かせること」についても強調されています。運動領域においては、体を動かす楽しさやできる喜びを味わうために「する・みる・支える・知る」と関連する手だてを教材と子どもを結び付ける多様な接点として設ける必要があります。</p>
11	<p>すべての子どもの <b>可能性を引き出す</b></p>  <p>運動・スポーツの<b>楽しさ</b>や <b>価値を実感</b>できるようにする</p>	<p>令和の日本型学校教育においては全ての子どもの可能性を引き出すことが求められています。運動やスポーツが苦手な子どもに対しても、その楽しさや価値を実感できるようにすることで、運動を「する」ことだけにとらわれず、多様な楽しみ方や関わり方を広げていくことができるようにします。</p>
12	<p><b>ひらく 未来</b></p> <p>時代の変化に対応できる学校体育</p> <p>北海道らしい<b>新たなスポーツライフ</b></p> <p>距離を越えた<b>コミュニケーション</b></p>	<p>こうした時代の変化に対応する学校体育の在り方、北海道らしい新たなスポーツライフの開拓、そして ICT 等を活用した距離を越えたコミュニケーションの活性化を図ることを目指します。</p>

13		<p>新たな価値を生み出していく過程を通すことで、児童生徒の自己実現が成し遂げられ、健康で活力ある生活が確立し、共生を意識した地域社会へ寄与していくものと信じています。</p>
14		<p>続いて、本大会の研究主題および研究内容について御説明します。</p>
15		<p>大会研究主題は「豊かなスポーツライフの実現を目指し、『自ら』課題を発見し、その解決に向けた学習過程を通して資質・能力を育む体育・保健体育学習」と設定しました。</p>
16		<p>この研究主題を設定するにあたっては、「学習指導要領の趣旨」「北海道の体育研究の営み」そして、「北海道の子どもの実態」の三点が背景としてあります。まず、学習指導要領の趣旨に基づいてです。</p>
17		<p>これは、文部科学省より示されている児童生徒の資質・能力の育成に向けて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることを目指したイメージ図です。令和の日本型学校教育の構築を目指して、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する個別最適な学びと、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす協働的な学びの一体的な充実を図ることが今、求められています。</p>
18		<p>現行の学習指導要領において三つの柱で整理された「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力。この資質・能力をバランスよく育成するために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を目指します。</p>

19	<p><b>学習指導要領の趣旨</b></p> <p>資質・能力の育成</p> <p>主体的・対話的で深い学びの実現</p> <p>個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実</p> <p><b>子どもの学習過程を重視</b></p>	<p>そのためには、子ども一人一人がどのように自分の課題を見付けたり発見したりしたのか、その課題解決に向けてどんな試行錯誤があったのかなど、子どもの学習過程を重視した授業改善を進めることが大切だと言えます。</p>																																										
20	<p><b>研究主題設定の背景</b></p> <p>学習指導要領の趣旨</p> <p>北海道の体育研究</p> <p>北海道の子どもの実態</p>	<p>研究主題設定の背景、二点目は、北海道の体育研究の営みからです。</p>																																										
21	<p><b>北海道の体育研究</b></p> <p>平成2年 自己の課題を達成する喜び 経験</p> <p>平成14年 教材の工夫と仲間との関わり 発信</p> <p>平成24年 確かな学力を保障する 指導と評価 提案</p>	<p>北海道ではこれまで三度の全国学校体育研究大会を開催してきました。平成2年の大会では、子ども自らが自分の能力に応じた課題をもち、その課題に向かって自主的に取り組み、達成する喜びを味わえるように学習指導の改善を図りました。平成14年は基礎・基本となる動きや技能を確実に身に付けることができる教材を工夫することで、仲間との関わりを充実させる学習指導の在り方を発信しました。平成24年には子どもに身に付けさせたい確かな体育の力を明確にすることで、どの子どもにも確実に獲得させていく指導と評価の在り方を提案しました。</p>																																										
22	<p><b>北海道の体育研究</b></p> <p>令和7年 子どもが自ら課題を発見し、解決に向かう学習 共有</p> <p>身に付けさせたい力</p> <p>課題発見・課題解決する学習</p>	<p>北海道はこれまで目の前の子どもの姿を大切に、どんな力を子どもに身に付けさせたいのかということを明確にした研究に取り組んできました。また、友達や仲間と豊かに関わりながら、課題を発見し、課題を解決する学習を大切にしてきました。こうした北海道の体育研究の成果を踏まえ、本大会では、子どもが自ら課題を発見し、仲間とともに課題を解決する学習を通して、三つの資質・能力を育むことを目指します。授業を通して、改めて課題解決する学習の在り方について議論し、皆さんと共有したいと考えています。</p>																																										
23	<p><b>研究主題設定の背景</b></p> <p>学習指導要領の趣旨</p> <p>北海道の体育研究</p> <p>北海道の子どもの実態</p>	<p>研究主題設定の背景、三点目は北海道の子どもの実態からです。</p>																																										
24	<p><b>体力・運動能力調査 合計点の推移</b></p> <p>小学校 男子</p> <p>小学校 女子</p> <table border="1"> <caption>小学校 男子 合計点の推移</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>全国</th> <th>北海道</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H29</td> <td>54.16</td> <td>53.70</td> </tr> <tr> <td>H30</td> <td>54.31</td> <td>54.09</td> </tr> <tr> <td>R.1</td> <td>53.61</td> <td>54.42</td> </tr> <tr> <td>R.3</td> <td>52.57</td> <td>53.82</td> </tr> <tr> <td>R.4</td> <td>52.70</td> <td>51.90</td> </tr> <tr> <td>R.5</td> <td>52.59</td> <td>51.74</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <caption>小学校 女子 合計点の推移</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>全国</th> <th>北海道</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H29</td> <td>55.72</td> <td>54.48</td> </tr> <tr> <td>H30</td> <td>55.90</td> <td>55.78</td> </tr> <tr> <td>R.1</td> <td>55.99</td> <td>54.47</td> </tr> <tr> <td>R.3</td> <td>54.64</td> <td>55.56</td> </tr> <tr> <td>R.4</td> <td>54.31</td> <td>54.04</td> </tr> <tr> <td>R.5</td> <td>54.28</td> <td>53.77</td> </tr> </tbody> </table>	年度	全国	北海道	H29	54.16	53.70	H30	54.31	54.09	R.1	53.61	54.42	R.3	52.57	53.82	R.4	52.70	51.90	R.5	52.59	51.74	年度	全国	北海道	H29	55.72	54.48	H30	55.90	55.78	R.1	55.99	54.47	R.3	54.64	55.56	R.4	54.31	54.04	R.5	54.28	53.77	<p>これは、令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査における北海道の児童生徒の実技に関する結果です。小学校は体力低下傾向に歯止めがかかり、体力合計点は昨年に比べ上昇し、全国との差も縮まりつつあります。</p>
年度	全国	北海道																																										
H29	54.16	53.70																																										
H30	54.31	54.09																																										
R.1	53.61	54.42																																										
R.3	52.57	53.82																																										
R.4	52.70	51.90																																										
R.5	52.59	51.74																																										
年度	全国	北海道																																										
H29	55.72	54.48																																										
H30	55.90	55.78																																										
R.1	55.99	54.47																																										
R.3	54.64	55.56																																										
R.4	54.31	54.04																																										
R.5	54.28	53.77																																										

25



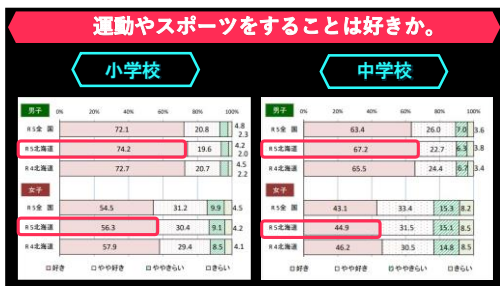
中学校においても小学校同様の傾向が見られますが、女子においては依然として全国との差が開きが見られます。体力・運動能力調査において北海道の児童生徒の体力は決して高くはない現状と言えます。

26



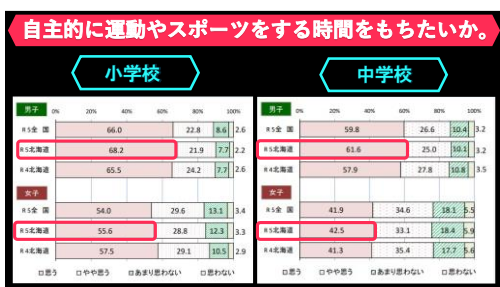
これは質問紙調査「体育・保健体育の授業は楽しいか」という質問における回答を示したものです。小中学校男女共に「楽しい」と回答する児童生徒の割合は全国平均を上回っています。

27



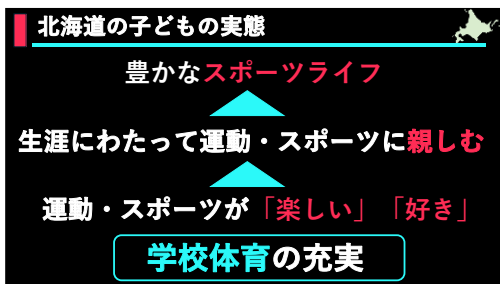
「運動やスポーツをすることは好きか」という質問においても「好き」と回答した児童生徒の割合は全国平均を上回っており、体育授業や運動・スポーツへの関心の高さが伺えます。

28



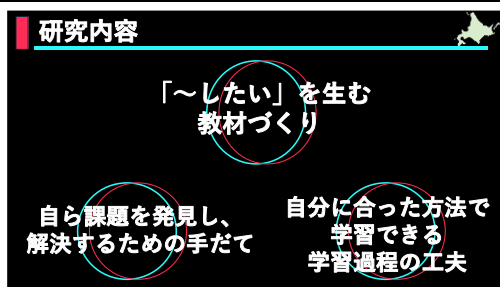
これは「小学校、中学校卒業後に自主的に運動やスポーツをする時間をもちたいと思うかどうか」についての質問結果です。こちらも「そう思う」と答えた児童生徒の割合は全国平均を上回っています。「運動やスポーツをすることが好き」と回答している児童生徒ほど進学後や卒業後に自主的に運動したいと思う割合が高いという傾向も見られました。

29






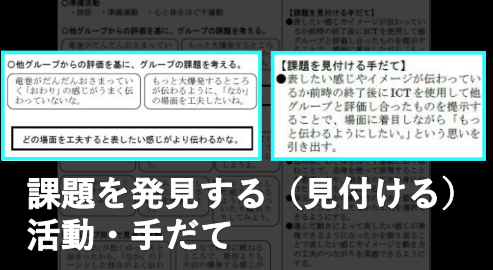
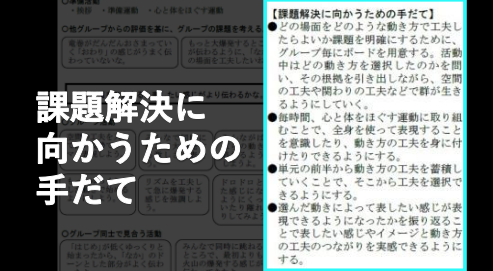
運動やスポーツをすることが「楽しい・好き」と感じる児童生徒が多いことは、北海道の強みです。より一層、体育・保健体育の学習の充実を図ることで、進学後や卒業後も運動・スポーツに親しみをもち、豊かなスポーツライフを実現することへつながっていくと考えます。以上が研究主題設定にあたっての背景です。

30



次に、研究内容について御説明します。研究主題の具現化を目指し、これら三つを研究の柱として取り組みます。

31	<p><b>研究内容</b></p> <p>「～したい」を生む 教材づくり</p> <p><b>学びの主演は子ども</b></p> <p>自ら課題を発見し、 解決するための手だて</p> <p>自分に合った方法で 学習できる 学習過程の工夫</p>	<p>三つの柱の根幹にあるのはすべて「子ども」です。学びの主演は子どもであるという認識をもつことが研究を進める上での前提となります。</p>
32	<p>小学校5年生 <b>表現運動</b> 「自然の脅威図鑑をつくろう」</p> 	<p>それでは三つの研究の柱の具体について、小学校5年生 表現運動「自然の脅威図鑑をつくろう」の実践を基に見ていきます。</p>
33	<p><b>研究の柱①</b></p> <p>子どもの「～したい」を生む教材づくり</p> 	<p>研究の柱一つ目は、子どもの「～したい」を生む教材づくりです。</p>
34	<p>子どもの「～したい」を生む教材づくり</p> 	<p>表現運動の特性である動きの広がり楽しさについてどの子も味わうことができる素地づくりを単元を通して大切にしました。オノマトペから動きを連想して動くオノマトペカルタで即興的に踊ったり、新聞紙を使った表現により、ねじる動きや不安定な状態など体の色々な部位を使った動きを引き出したりする活動を行いました。</p>
35	<p>子どもの「～したい」を生む教材づくり</p> 	<p>また、一人一台端末を活用して動画を共有できる仕組みを生かし、「自然の脅威が伝わる動画を作成しよう」という学習のゴール(目標)を設定しました。単元の始めに「なりきり自然ビンゴ」と題してペアで即興的に踊ったり、動きを ICT で蓄積したりする活動を行うことで、「もっと人数を増やして踊ってみたい。」「他の題材も表現してみたい。」という子どもの思いが生まれるようにしました。</p>
36	<p>子どもの「～したい」を生む教材づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 運動・スポーツの楽しさや喜びを味わう</li> <li>■ 単元で目指すゴールの設定</li> <li>■ 共生の視点を踏まえる</li> <li>■ 子どもの発達段階や実態に合わせる</li> </ul>	<p>このように、運動やスポーツの楽しさや喜びを単元を通して味わうことができるようにするとともに、単元で目指すゴールを明確に示したり、男女や技能差に関係なく取り組めるよう共生の視点を踏まえながら、子どもの発達段階や実態に合わせたルールや場づくりを考えたりすることなどを、教材づくりで大切にします。</p>

37	<p><b>研究の柱②</b></p> <p><b>子どもが自ら課題を発見し、解決するための手だて</b></p> 	<p>研究の柱二つ目は、子どもが自ら課題を発見し、解決するための手だてです。</p>
38	<p><b>子どもが自ら課題を発見し、解決するための手だて</b></p> 	<p>本実践は、自分が表現したい自然現象を一つ選び、選んだものが同じ子同士でグループをつくり、ひとまとまりの動きにする表現活動をメインにしました。その過程の中で、動きをグループ同士で評価しあう活動を取り入れ、その他者評価をもとにグループの課題を見付けることができるようにしました。</p>
39	<p><b>子どもが自ら課題を発見し、解決するための手だて</b></p> 	<p>どの場面をどのような動き方で工夫するか課題を明確にするために、グループごとにボードを用意し、解決の見通しをもてるようにしました。自分たちの表したいイメージをより相手に伝わるようにするために、単元を通して蓄積してきた動きの工夫やリズムの工夫などを参考にしながら動きを通した課題解決を目指しました。</p>
40	<p><b>課題を発見する（見付ける）活動・手だて</b></p> 	<p>学習指導案には、子どもがいつ、どのような課題を見付けたり、発見したりできるようにするのか、そのためにどのような活動を行うのかを位置付けます。</p>
41	<p><b>課題解決に向かうための手だて</b></p> 	<p>また、課題を見出した子どもがどのように解決していくのかという姿を十分に想定し、解決に向かうための手だてを示すようにします。</p>
42	<p><b>子どもが自ら課題を発見し、解決するための手だて</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 目標（めあて）を共有する</li> <li>■ 自ら課題を設定する</li> <li>■ 解決の見通しをもつ</li> <li>■ 学びを振り返る</li> <li>■ 自己の高まりを実感する</li> </ul>	<p>このように子どもが自ら課題を見付けたり、発見したりして解決する学習を通して、自己の高まりを実感できるようにします。そのためには課題設定や解決の見通しをもつ活動、振り返りの充実が不可欠であり、教師はその手だてを講じる必要があります。子どもが自分の課題を解決する過程と成果を自覚する学びを繰り返すことで資質・能力は育まれていくと考えます。</p>

43	<p><b>研究の柱③</b></p> <p><b>子どもが自分に合った方法で学習できる学習過程の工夫</b></p> 	<p>研究の柱三つ目は、子どもが自分に合った方法で学習できる学習過程の工夫です。</p>			
44	<p><b>子どもが自分に合った方法で学習できる学習過程の工夫</b></p> 	<p>対話的な学びにおいて、他者との関わりは欠かせません。自分たちのイメージした動きが伝わるかどうかを直接見合ったり、仲間に撮影してもらった動画を見たりすることで、理想の動きへと近づけていきます。踊りを工夫する時間、見合う時間、撮影する時間など、教師がすべて設定するのではなく、子どもが自分たちで決めることができるようにすることで、必要感のある学びにしていきました。</p>			
45	<p><b>子どもが自分に合った方法で学習できる学習過程の工夫</b></p> <p>テーマ「グルリンザパー巨大な台風」</p> <table border="1" data-bbox="359 795 662 918"> <tr> <td>はじめ 小さい台風がたくさんある感じ 伝わらない</td> <td>なが 少しずつ集まって大きく回る感じ 伝わった</td> <td>おわり みんな一つ一つの大きな台風になっていく感じ 伝わった</td> </tr> </table> 	はじめ 小さい台風がたくさんある感じ 伝わらない	なが 少しずつ集まって大きく回る感じ 伝わった	おわり みんな一つ一つの大きな台風になっていく感じ 伝わった	<p>本実践では、他グループの表現を見て相互評価する場面や振り返りの場面で ICT を活用しました。文字入力だけでなく、実際の動きを動画で撮影したり、教師が個別に聞き取りながら行ったりするなど個に応じた多様な方法で振り返るようにすることで、自分の学びを自覚できるようにしました。</p>
はじめ 小さい台風がたくさんある感じ 伝わらない	なが 少しずつ集まって大きく回る感じ 伝わった	おわり みんな一つ一つの大きな台風になっていく感じ 伝わった			
46	<p><b>目標・評価規準</b></p> <p><b>1時間の学習の流れ</b></p> <p><b>評価の重点</b></p> 	<p>学習指導案には、単元構造図という指導と評価の計画を作成し、単元の目標や評価規準、1時間ごとの学習の流れ、その時間に何を重点に評価するのかが明確になるようにします。評価規準や目標を明確にして子どもへの関わりをもつことで、授業改善を図ります。</p>			
47	<p><b>子どもが自分に合った方法で学習できる学習過程の工夫</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 他者との <b>関わり</b></li> <li>■ 課題解決の道筋を <b>自己決定</b></li> <li>■ ICT の効果的な活用</li> <li>■ 教師や子どもによる <b>評価活動</b> (取り組み方・学習過程)</li> </ul>	<p>子どもが課題を発見し、解決に向けて活動する際には、他者と関わり、解決の道筋を自己決定できるような学習過程にします。その際、ICT 等を効果的に活用することで、他者の考えを取り入れたり、交流したりできるように工夫します。教師による評価と子どもの自己評価の両輪により、子どもの課題解決への意欲を高めていけるようにします。</p>			
48	<p>第60回北海道学校体育研究大会 兼 第64回全国学校体育研究大会 北海道大会プレ大会 <b>札幌</b>大会</p> <p>各支部の会員をつなぐ 全国大会への道をひらく 分科会に</p> 	<p>この後の分科会では、全道各支部の皆さんの活発な討議により、全道統一研究主題、そして、大会研究主題に迫っていけるものになることを期待し、基調報告ならびに研究発表を終わらせていただきます。 ご清聴ありがとうございました。</p>			

# 北九条小会場 一次公開 蝦名裕貴教諭実践

## 第3学年 多様な動きをつくる運動「お宝を探せ！トレジャーハンター」

### ○討議の中心的な話題

〈動きの「広がり」について〉

- ・動きが広がることをねらうのであれば、交流はペアではなく他のグループと行う方がよかつたのではないか。
- ・ペアで運動を行っている中でも思考が深まるような教師の関わりが必要だったのではないか。

〈課題発見について〉

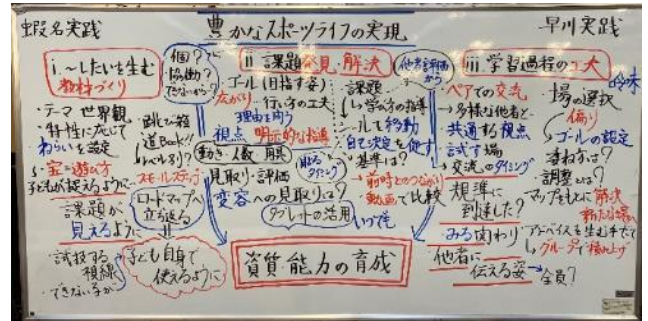
- ・「お宝を発見しよう！」という課題から、個人での課題は何をねらっていたのか。  
→一人一人がこの運動をしたいという見通しをもっていることを課題と捉えていた。
- ・「広がり」とは、「～したい」という思いをもつだけでよいのか。

### ○質疑応答

- ・子どもたちが運動している際に、どのような関わりを大切にされたか。  
→どのような運動にしたのか、なぜそうしたのかなど、根拠を引き出すような関わりを大切にされた。
- ・子どもがそれぞれ運動していく中で、どのように変容を見取り、評価しているか。  
→他者が行っている運動を見たり、試したりしている姿に着目し、共有することを大切にしている。

### ○討議から見えてきた課題

- ・子どもの動きを変容させるための教師の関わりや手だて  
→子どもたちの活動を活性化できるような交流のあり方や工夫の視点の持たせ方の吟味



### ○講評

〈北海道教育大学旭川校

教授 高瀬 淳也 氏〉

- ・運動素材（教材）について、教え学ばれるべき内容を単純化してクローズアップした世界を子どもたちに伝えること自体が教材化になる。3年生の子どもたちにとって、「お宝（動き）を見付ける」という活動は、発達段階への適合、学習内容を誇張させるという点でよく考えられていた。
- ・教材づくりがしっかりしていると、子どもたちにとって安心感があり、安心感があるからこそ課題選択をできるということにつながる。
- ・子ども同士の伝え合う環境を整えても、必ず効果が上がるとは限らない。意図的・計画的・攻略的に交流や活動の機会を設ける必要がある。
- ・学習評価に関わって、お宝発見タイム①から②へ、動きの変容があるべきで、そこを評価することになる。お宝発見タイム①に工夫の視点の選択が加わることによって、変容が見られるはず。本時ではこの選択の要素が薄くなってしまったため、動きの変容が見えにくくなっていた。より教師が関わり、子どもの思考を揺り動かしていく必要がある。

# 北九条小会場 二次公開 早川詩織教諭実践

## 第6学年 跳び箱運動「跳び箱運動レベルアップへの道」

### ○討議の中心的な話題

〈ロードマップについて〉

- ・練習方法を細かく区切って環境設定に落とし込むと、より子どもが自分で学びを進めていけるのではないかな。
- ・子ども自身がロードマップに立ち返りながら運動したり意思決定したりしていけるものだとよい。
- ・2段で技ができていないのに3段に挑戦するなど、ロードマップが機能していない場面も見られたため、技ができないことを前提にしたロードマップに修正するなど改善の余地があるのではないかな。

〈他者に伝える姿について〉

- ・本時の目標である「他者に伝える」ということは、全員ができていたのかな。
- ・技の得意な子、苦手な子に関わらず全員が伝えるようにするためには、試技の前に見てほしいポイントを伝えることで、見ている側がその可否を伝えることができたのではないかな。

### ○質疑応答

- ・「練習の場を調整できる」の捉えは。  
→ロードマップを基に、易しい場と課題解決の場を行き来するなど、自分はここまでならできるというのを見付けて次の場を選択していくことを「調整」と捉えていた。

### ○討議から見えてきた課題

- ・子どもが課題を更新していくための教師の関わりと手だて  
→ロードマップの活用方法の工夫や交流場面の設定による、自分の姿を振り返ることができるようにしていく。



### ○講評

〈北海道教育大学旭川校

教授 高瀬 淳也 様〉

- ・子どもの主体的な学習を促すためには、教える側の教師のもつ到達目標を、学ぶ側の子どもが自覚する学習目標に転化する必要がある。本時では、前時での振り返りがきちんとされていたことにより、課題が円滑に進んでいた。教師が学習内容や方向性を示したことにより、子どもたちが課題を選ぶことにつながった。
- ・支援の必要な子どもをしっかりサポートすることで、前よりもできたという姿を生むことができていた。練習の初期には高い相対頻度でフィードバックを与え、少しずつ減らす方が伸びると言われている。軽重をつけた教師の意図的な関わりが重要。
- ・跳び箱運動の楽しさ（達成、協力、挑戦、気楽さ、脚光）の視点から、達成（できた）の後には、条件を変える（高さを変える）、より上手にできる（雄大・優美）を求めていくことが大切。
- ・自分がどう表現できているか見えないと条件（高さ）にのみ意識がいつてしまう。ICTを活用して動画で演技を見直すことで、雄大さや優美さを自ら求めることができるのではないかな。

# 白楊小会場 一次公開 西村勇吾教諭実践

## 第2学年 リズム遊び「リズムに乗って楽しく踊ろう！」

### ○討議の中心的な話題

〈視点①に関連：

敢えて踊りを五つ与えたことについて)

- ・五つに踊りを絞って、与えたことで曲の中で止まってしまう子どもがいなかった。基盤があるからこそ、工夫へと繋がっていた。
- ・踊りが絞ってあることで、自分でもやってみようと思えた。再現性と提案性が非常に高い授業であった。

〈視点③に関連：

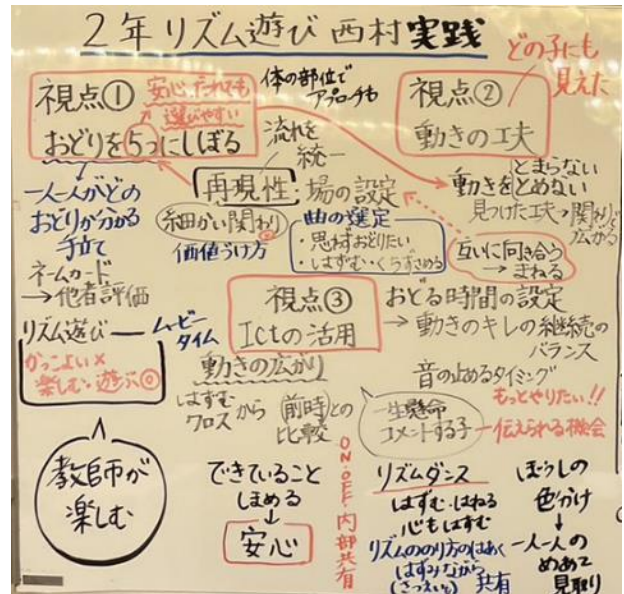
ICT を活用したムービータイムについて)

- ・1人1台端末で撮影しながら、声を出して関わろうとする姿から、ICTの効果的な活用方法が見出せた。
  - ・ムービータイムで授業の勢いが止まったように感じた。
- 運動量が多いので、休む意味も込めている。伝え合うことが目標としてあるので、そこに向かうために位置付けている。

### ○質疑応答

- ・五つに絞った踊りはどのようなところに気を付けて決めたのか。
- 授業作りの中でダンス経験のない大学生にインタビューしながら、「恥ずかしくない」「工夫しやすい」踊りを考えていった。また指導要領に記載のあるものを入れている。
  - ・リズム遊びの学習をする際に大切にしてほしいことは何か。

→求めるものはアイドルなどが踊っている“映える”ダンスではない。かっこよかったり、すごかったりする必要はない。遊びを第一にしていくことは重要。



### ○討議から見えてきた課題

- ・ICTの活用において、撮影中に言葉を入れることで自己評価や他者評価を得ることにつながる。また教師の形成的評価にも活かすことができる。低学年のうちから目的に応じて活用することで、ICTを活用する技能自体も高まってくる。

### ○講評

- 〈千葉大学 准教授 七澤 朱音 氏〉
- ・リズムダンスは跳ねることが大事。弾むに注目したことが素晴らしい。また帽子の色で学びの個性化・指導の個別化を行っていたアイデアがとても良い。
  - ・短い全体交流の際、動きが止まっていたので、動きを止めずに集合してもよかった。弾み直しの必要がなくなる。
  - ・1人1台端末で撮影すると踊れない。身体共感能力を高めるためには、一緒に踊るようにし、その能力を耕してあげたい。
  - ・もっと踊りたい気持ちを作るために、ONとOFFを作り、気持ちを入れてあげる。



# 羊丘中会場 一次公開 黒坂洋匠教諭実践

## 第1学年 器械運動「平均台運動」

### ○討議の中心的な話題

〈練習方法や場の設定について〉

- ・平均台運動は、副読本などでの練習方法についての例示が乏しく、専門書や先生方と授業づくりを進めていく中で作り上げたので、まだまだ改良が必要である。
- ・場の設定は、毎時間子どもが準備・片付けをしているので、場づくりに時間がかかってしまうことが課題ではあるが、一人一人の試技の時間が増え、恐怖心なくチャレンジできるところにメリットを感じている。
- ・1年生なので、練習方法を提示し選択させる活動にしたが、3年生では、より子どもの意欲を引き出すために、自分で練習を考えるところにもチャレンジしたい。

### ○質疑応答

- ・美しさに重きを置かなかったのはなぜか？  
→平均台の上で活動することに重きを置いたので、1年生では、細かい美しさまではいかずに、3年生の選択体育で、より美しさを求めていきたい。
- ・授業の振り返り方、主体の評価について  
→授業の初めにブックレット（小冊子）を配付して学習記録を蓄積し、子どもが授業を振り返られるようにしている。主体の評価に関しては、C評価をいかにBにするかを大切に授業を行っている。

### ○討議から見えてきた課題

- ・練習方法や場の設定の更なる改良。
- ・B評価の生徒に対して、いかにA評価のイメージをもたせ、引き上げていくか。
- ・思考・判断・表現の観点における根拠の示し方の積み重ねを大切にしていくこと。
- ・振り返りの時間を十分に確保すること。



### ○講評

〈岩手県教育委員会

首席指導主事 千田 幸喜 氏〉

北海道の取組の成果として、以下の点を挙げてくださった。（北海道すごい）

- ほ 1 保健体育の目標の実現に向けた研究
- つ 2 積み重ねられている研究実践
- か 3 改訂の要点を意識した研究取組
- い 4 一体感のある研究体制
- ど 5 動画等の効果的な活用
- う 6 運動・スポーツ好きの生徒育成
- す 7 数値等による客観的なエビデンス
- こ 8 合理的な解決に向けた学習過程
- い 9 育成を目指す三つの資質・能力

#### ◆「平均台運動」の授業について

- ・「友達と関わること」が授業の楽しさにつながるというデータがあるが、まさに子ども同士の関わりで溢れていた。
- ・「支える」という関わり方の学習体験を、「目印をつくる」「手や体を支える」「アドバイスをする」などにより、全ての子どもに提供していた。
- ・授業時間が進むにつれて、子どもたちの活動がより活発になり、活動自体がステップアップしていた。
- ・単元の前半に技能を見とる時間を設定することで、C評価の子どもを把握し、指導に生かしたいという授業者の意図が良い。

# 羊丘中会場 二次公開 及川史斗夢教諭実践

## 第2学年 体育理論「運動やスポーツの安全な行い方」

### ○討議の中心的な話題

〈活動のつながりについて〉

- ・前半のカードゲームが教材としてとても魅力的であった。グループでの活発な交流、協働的な学びを創出していた。
- ・1人1台端末を用いた後半の活動で行き詰まる生徒が数名見られた。前半での気付きが後半の活動につながるよう、教師の働きかけが大切である。

〈主体的に知識を身に付けるための手だて〉

- ・知識の習得が教え込みにならないよう、実際にけがをした過去の事例、保健室の来室状況、子どもたちからとったアンケートを活用するなど、自分ごととして捉えられるような工夫も有効である。

### ○質疑応答

- ・体育大会安全標語の作成に難しさを感じる生徒への手だては想定していたか。
- ホワイトボードに貼って整理した「強度」「用具」などのキーワードがもっと標語に活用できるよう、働きかけが必要だった。
- ・“安全=けが予防”だけでなく、不安など精神面へのアプローチも必要では。
- 今回は学習指導要領をもとに身に付けさせたい知識を整理し、精選した。

### ○討議から見えてきた課題

- ・教え込みにならず、主体的に知識を身に付けていく授業展開の工夫。
- ・体育理論と実技とを結び付ける工夫。
- ・協働的な学びを創出するため、ICT活用と言語活動とのバランス。

### ○講評

〈岩手県教育委員会

首席指導主事 千田 幸喜 氏〉

#### ◆「体育理論」の授業について

- ・3時間扱い全ての授業で「本時の振り返り」が単元構造図に明記されている。最後にシェアする時間を設けることで、理解が不十分だった生徒も知識の整理を行うことができる。
- ・本時は「思考」ではなく「知識」の授業であることから、ホワイトボードで整理した六つの用語が理解できているかどうかが重要。最後の体育大会安全標語の作成は、その知識の「深化」を図るためのものとして効果的な設定である。
- ・北海道は生徒がICTを効果的に活用できているという実感の高さが、調査結果で表れている。文房具のようにICTを当たり前で扱える実践を継続すると同時に、大事なものは「何を教えるか」であり、あくまでICTはツールであることを忘れてはならない。
- ・体育理論を通して「共生」の視点や、運動への多様な関わり方である「する・見る・支える・知る」のうち、特に「支える」ことについて理解を促し、実技の授業を通してその機会を創出することが大切。



## 第 60 回 北海道学校体育研究大会 札幌大会

兼 第 64 回全国学校体育研究大会北海道大会プレ大会

兼 第 33 回札幌市学校体育研究大会

発行日：令和 6 年 12 月 6 日（金）

発 行：北海道学校体育研究大会札幌大会全国プレ大会

実行委員長 嶋本 剛

印 刷：株式会社 大弘社印刷

〒064-0821 札幌市中央区北 1 条西 28 丁目

TEL011-614-4121